

オンラインで P4C 報告

2022 年 7 月 23 日 (土) 15:00~ 17:00

場所 オンライン

主催 P4C in schools KANSAI-JAPAN

発表者 中谷 栄作 和歌山県橋本市立あやの台小学校教員

対象 学校関係者

参加費 無料

参加者名

発表内容

「正義ってなんだろう」

参加者数 11 名

最初に参加者の自己紹介

道徳科での P4C

5 年

経緯 一杯発表できて好き

道徳と国語はどう違う

だって、〇〇が言ったからといって、自分で判断していない。

自問自答して欲しい

課題

「安心できた」の割合が低くなっている。

質疑応答・議論

Q：子どもの主体性に任せるといいことだと思うが、「正義と悪」というテーマの場合、例えば、「戦争したっていいじゃん」というような過激な発言が出たとき、この発言が子どもが真剣に考えた末に発言した主張であれば、それを尊重するのか。何を言ってもいいと言っても、教育現場でこのような発言が出た場合、どう対処するのか。

A：確かに、「暴力も OK」という発言が出た時、どうするかを考えながら授業に入った。今までの自分だったら、「そんな考えはダメだよー」と言ってしまっただろうが、今は、子どもにいったん預けるという態度で、反対意見が子どもから出なければ、「みんな、ど

う思ったん」という形で、後で聞いてあげると、色々な意見・考え方が出て、なぜ暴力がだめなのかという理由も明らかになっていく。子どもたち自身の議論に一種の自浄作用があると信じている。そういう意味で子どもに任せている。

C-1：真面目に過激な発言をする子も、その発言には何らかの背景・事情がある。最初は議論にならない場合が多いが、最初から否定するのではなくて、理由などを聞いて、対話的に進めていく。一回の授業で終わらない時もある。その時は、次はどう話を進めていくかを考える時間がある。また、授業以外の所で、その子とどうかかわるかということもある。真面目に発言した子に対しては、真面目に応じたい。

C-2：極端な意見を言うこの場合、自分から意見を吐き出してみたい、という場合もある。必ずしも実際はそう思っていないでも、そういう意見と距離を持ちつつ吟味しようとして、そのような意見を吐き出しているという場合もある。言っている言葉とその子自身との関係みたいなものを丁寧に見ながら、対話したい。

C-3：子どもの家庭環境が想起される。P4C の授業では、教師の肩書は捨てて、事と同じ仕方で議論をするが、ただ、教師としては、暴力は OK とは言えない以上、教師の肩書は捨てられない。このようなことがもろに出てくるのが、正義の問題であって、これを取り扱うのは難しい。

C-4：保育、子育ての状況の中で、正義のことが話題になった。子どもが間違っただけをした場合、親としては即座にその間違いを正すということがあったとしても、教育の場面では難しいのではないかな。

C-5：子どもにとってはやはり教師は教師なのかなと思う。だからこそ、教師としての伝え方の難しさというのがある。教師というもののしがらみは大きい。

C-6：教師という肩書がある以上、まずい発言をした時、どう蓋をするかという発想があったが、P4C に出会って、そこに蓋をしなくてもいい、そこに耳を傾けて、考えてみてもいいという方向が見えてきたと思う。

C-7：場がうまく作れていけば、子どもは、いい意味で、教師の言うがままとは必ずもならない。

C-8：過激な発言をする子にはやはり背景・事情があり、担任の先生はそのことをある意味良く理解できているのではないかな。P4C をしているからこそ、そのような発言が出てきたのではないかな。そのような発言に対してどう対処すべきかということ以上に、そのような発言が出たことに意義があるのではないかな。

Q：仮に「正義」というものがあるとして、それでは我々はどうしてそれが正義と言えるのだろうか。我々には正義を判別する能力はあるのだろうか。一個人としての意見は言っても、実際のところは分からない。

A：問題が複雑すぎて、意見が言えない子が出てくることはあるが、それでも感覚的にも、P4C をしている時には、「僕はこう思うんだけど」と言えるような場にしたい。友達

にどう思われるとか、先生にどう思われるのかというような気持ちは減って欲しい。

C-9：今日発表していただいた授業の振り返りに、楽しかった、議論が深まったということは数字が高くなったが、安心して話ができたとすることは数字が低くなった。それは、テーマが重かったせいではないか。議論をする過程で、むしろよく分からなくなってきた。自分は正しいか間違っているかという問いに、自分では答えられなくなっていく。それが安心できたというのとは違う感覚を子どもたちに抱かせたのではないか。自分が具体的にどう判断をするのかということに対する難しさを子ども自身も自分なりに受け止めたということではないか。

C-10：私も同じ意見で、子どもは不安になったのではないかと思う。現在の世界の状況の情報も入ってきて、多分不安になったのではないか。だから安心感がなくなり、自分ではうまく答えられないと思った。それでも、P4C では議論をすることが可能だという点で、可能性があるのではないか。

C-11：過激な発言・極論であっても、この教室では言ってもいい、言えるのだという雰囲気があるのは大切ではないか。その上で、議論が展開し、多様な意見を聞いて、自分の意見を反省できるようになれば、すごいことではないか。P4C では何も語らないことも許されてはいるものの、やはり、話すようになっては欲しいという気持ちはある。何らかの意思表示ができるようになってほしい。話すことによって、相手が理解するチャンスがある。P4C をしていると、無理やり仲間づくりをするのではなく、ある意味、自然と仲間作りができているという実感が強い。P4C にはそのような力がある。

C-12：P4C によって言える場が作られるということはわかるが、そのような場が作られるにはやはり、聞く人・聞ける人がいるということも大切ではないか。「人が話しているときに邪魔をしてはいけない」というのが、道徳の授業であれば、それを発言したのがどんな子であれ、そうだとすることで話は進むが、P4C の場合は、「お前がそれを言うか、お前こそそれを実行していないじゃないか」と友だちから言われる、言ってもらえるというような場が作られているのではないか。

その他、高校の公共の授業の問題など、色々なテーマが話題になった。